



TITLE:

獨逸最近の社會學論(二)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

---

CITATION:

米田, 庄太郎. 獨逸最近の社會學論(二). 經濟論叢 1924, 18(4): 757-767

ISSUE DATE:

1924-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128156>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 十 八 卷      第 四 號

大正三十三年四月一日發行

故戸田海市博士肖像并に哀詞

## 論 叢

虞夏書に見<sup>は</sup>れたる政治經濟思想……………法學博士 田島 錦治  
階級の動學的考察……………文學博士 高田 保馬  
獨逸最近の社會學論……………文學博士 米田庄太郎  
植民地の經濟政策に就きて……………法學博士 山本美越乃

## 時 論

不景氣と租税……………法學博士 神戸 正雄

## 說 苑

一子相續制度に就いて……………經濟學士 八木芳之助  
客觀的勞賃論の史的發展……………經濟學士 森 耕二郎

## 雜 錄

戸田博士逝く……………戸田海市君の追懷(西田幾太郎)……………戸田博士を憶ひ  
て(福田無三)……………戸田君の追懷(神戸正雄)……………追憶の斷片(河上肇)……………戸田  
博士と私(河田嗣郎)……………戸田先生を憶ふ(小島昌太郎)……………戸田博士と大阪  
市勞働調査事業(關 二)

# 獨逸最近の社會學論 (二)

米田庄太郎

## フオン・ペーロー氏の社會學論 (其二)

今ベツケルは社會學は、只總合のみから成立すると云ふて居る、しかし彼は其の意味を詳しく説述して居ないから、彼の社會學概念を精確に學ぶことが出来ないが、とにかく彼は「科學的政治學及び現代史は社會學に屬するものである」と云ふて居ることから察すると、彼の社會學なるものは、其他の多數の學科をも包括するものと推論せねばならぬ。政治學及び現代史は社會學に屬す可きものとすれば、哲學も、法學も、經濟學も、風俗學も、民族學も、地理學も、言語學も、藝術學も、神學も、舊式の歴史も、悉く皆な社會學に屬す可きものと、考へねばならないでないか。ベツケルが大學に於て新説せんとする社會學なるものは、此の如き普遍的な或は一般的な學問であると思はれる。

されど先づ第一に考ふ可きは、總て一般的或は普遍的學問なるものは、本來存立し得ないものであると云ふことである。只デイレタンテンのみが普遍的學問を作らんとするので普遍的文化學

とか普遍的文化史とか云ふが如きものも、矢張り其の例である。而してベツケルの解するが如き意味の普遍的學問としての社會學の如きも、第一には不必要にして、第二には不可能である。

先づかゝる社會學が必要でない云ふのは、是れ既に述べし如く多數の特殊科學が永い以前から、甚だ有効に社會學的問題、詳しく云へば人間共同生活關係の問題を研究して居るからである。尙ほ個人と共同團體との關係が、啻に種々なる科學によりて熱心に研究されて居るのみならず、更に其等の科學の相互的接觸及び彼等の間の境界地帶の設定によりて、彼等の間の必然的關係は保持され、強められて居る。而して哲學が中心的學問としてか、又は特殊な認識批判的吟味者としてか、他の諸學問の結果を考察し、彼等の間に存する結合線を闡明することの甚だ有益なるを認めると同時に、吾人は夫れ夫れの専門家が自分の仕事を益々深く理解し、遂行するほど、社會學的問題は常に益々有効に研究されると考へるのである。まさしく個別科學が夫れ夫れ熱心に社會學的問題を考究するが故に、社會學的問題は益々根本的に取扱はれ、益々微細に究明されて來たのである。

此處に法學に就て一例を舉げて見よう。ギールケの如き學者の研究の全體は、根本的に社會學的研究である。彼の取扱へる多數決原理の歴史と云ふ特殊の問題は一の勝れた社會的な問題である。又個人と共同團體との關係に就て、諸國民の抱ける思想の差別を闡明せんとするは、ギール

ケの研究の一の主要目的である。更に組合に關する彼の一切の研究は矢張り社會學的研究である。尙ほ經濟學の領域に於ける、カールタルの種類、生起及び作用に關する彼の研究も亦、同様である。余輩は右に述べし以上に實例を擧げる必要はないと思ふ。要するに社會學的問題の益々深き又詳しき研究は、只益々進み行く分業的研究によりてのみ遂成されるのである。

然るに一個人學者が其等諸科學の總體を支配する普遍的學問、ベツケルの意味するが如き社會學を建設し、大學に於て社會學の教授として講義せんとするに於ては、其等の人々即ち社會學者は、實際上何をなすであらうか。只諸科學の教科書からの拔萃を集めて陳述するに過ぎないであらう。其等の人々は總てを理解して、何物をも理解しない人であるであらう。而して從來時々行なはれたるかゝる編輯、或は拔萃集は、科學的著作の中に數へ得られなかつた、又數へらる可きものでない。併し社會學者は或一科學に於て専門家であり得ると、云ふ人があるかも知れないが、かゝる専門學者は多分之れに答へて左の如く云ふであらう。「余は余の狭い専門の學科に於て、社會學的問題の研究の爲めになす可き多くの仕事を有つて居るので、夫れ以上の義務には堪へ得られない。」實際に於て經濟學者は自分の専門の研究を傷害することなしに、言語學の問題を解決することが出來ず、同様に法學者は藝術史の問題を解決することが出來ない。彼等若し之を敢てするならば、彼等の精神も名譽も傷けられるであらう。普遍的學問、普遍的社會學なるも

のは、大學に於て獨立なる教授によりて代表される、眞實なる一の學問として成立することは、到底不可能である。

尙ほ右に述べし處によりて察知される如く、普遍的或は一般的社會學を大學の一教科として宣言することは、有害である。更に夫れは國家が直接にディレクタンチズムを獎勵する事になるから一層有害である。此處に尙ほ其の弊害の一を特に述べて置きたい。吾人は近來起れる専門科學に於ける所謂「社會學的把握或は解釋」なるものの侵入を、既に悲まざるを得ない状態にある。經濟學者も、法學者も、歴史家及び其他の學者も、今やまさしく「社會學的」に思考せねばならぬと云はれて居る。而して此の事は若し個々の事實の諸關係の一の客觀的な、夫れ故に總方面的な考察が必要であると云ふこと以上を意味しないならば、夫れは實に有益な警告と認めらる可きである。されどよく考へて見ると、夫れ夫れの場合に於ては、其の評價の爲めに何れかの關係が、常に特に重要視されねばならないことが覺られる。然るに今日、吾人は所謂「社會學的見地」なるものの混入し來れることによりて、經濟的、法律的、歴史的其の他の社會現象の特有の定義を下すことが、屢々不可能になつて居るのを見る。人々は特に法學的な定義、特に經濟學的な定義など、夫れ夫れ自分の正當なる權利を有することを忘れて居る。而して此の混亂は、普遍的社會學なるものを、文部省が保護することによりて、自から益々増大するであらうと思はれる。

尙は普遍的學問としての社會學の不可能なることは、さきにも述べし如く、眞面目な社會學者（但し其等の人々は何れも夫れ夫れ近來の一の専門學科の大家である）が皆な之を排斥して居るのを見て、一層明白に證明されて居ると思はれる。そこで余輩は更に、一の特殊科學としての社會の建設は、果して成就され得るものなるや否やを考究して見ようと思ふ。而して此處に二つの問題が起る。夫れは個人と共同團體との相互作用の形式、或は社會化の形式の一科學が成立することができるか否かと云ふ問題と、夫れが特殊な科學範域として生存能力を保有する様に、取扱はれ得るか否かと云ふ問題とである。第一の問題に就ては此處に詳しく論ずる必要はない。是れ第二の問題、即ち其等の形式の研究が、一の特殊な専門家として、是れまでの専門家以外の人々に依て遂行され得るやと云ふ問題の答解が、第一の問題の解決を與へるからである。而して第二の問題の答解も、亦既に述べし處によりて與へられたと思ふから、此處には余輩の見解から實際的教授法に對して、夫れから或結論を引き出すに止めて置く。

此處に普魯西の文部大臣によりて任命された社會學の一教授があつて、眞面目に其の職務に力を盡くすとする。彼若し或特殊な學科の専門家であるならば、彼の職務に對する彼の解釋は、彼をして益々彼の専門學科を深く研究するに至らしめるであらう。勿論彼は接近せる學科にも亦目を放つが、しかも常に益々深く本來の専門學科の研究を進めるであらう。是れ若し然らずは彼は

彼の力を分散させ、而して彼の研究を眞に進歩させることが、出来ないからである。然るに各特殊科學の任務は今や甚だ廣大となりて、専門學者が之れに全力を注ぐことを要求して居る。否、各専門學者が生涯全力を注いでも、尙は其の任務の全體を盡くし難き有様である。かくて社會學の教授に任命された其の専門學者が、自分の研究を本來自分の専門學科に限り、夫れを越へて進み得ないことを悟る時は、彼はまさしく彼の専門學科を代表し、而してそうする事に於て、彼が普遍的社會學者として世に認められんとするよりは、一層大なる満足を見出すであらう。しかも彼が研究し、又講義に於て取扱ふ總てのものは、實際上大なり小なり彼の専門學科から考究された社會學、詳しく云へば人間共同生活問題の一複合であるのである。尙は大學に於て實際上社會學の講義として與へられるものは、どんなものであらうか。夫れは實質上、社會學に關する一の私講義以上のものでは有り得ないであらう。而してかゝる講義は、一の専門學科の教授、例へば法學の教授とか、經濟學の教授とか、史學の教授とかが、自分の領域から社會學的觀察を寄せ集め、更に他の専門家の著作を閱讀して得たるものを以て、之を増補することによりて、立派に與へ得るものであると思はれる。併し社會學の教授は、次のゼメスターに於て、何を講義すべきか。彼若し社會學に關する講義を以て尙ほ、二三ゼメスターを充たすとすると、彼は大に特殊的専門的となるであらう、而してベツケルが彼に望む處の目的、即ち百科全書的知識を與へると云ふ目的



を、實現しないであらう。そこで余輩は文部省が非専門家を社會學の教授に任命する場合を考へて見ると、若し其の任命された人が、誠實な人物であるならば、彼は難溥な不成熟な彼の考へを、學生の前でガラ／＼陳述せねばならぬ苦痛に堪へかねて、間もなく其の職を辭するであらう。何れの學科範域に於ても専門家でない云ふことは、今日學者である可き人々にとりて、最も苦しき或は恐ろしきことである可きである。

併し哲學者は或程度まで一の特殊な地位を占めて居る。哲學は一般に何れかの意味にて常に心理的學問として認められるから、夫れは特殊的諸科學の結果を概念的に吟味し、又其等の諸科學を認識論的に基礎附ける權利を有する。夫れよりして、又は哲學者は世界形像を獲得せんと努力すると云ふ事情からして、又は哲學者の心理學的興味は彼をして右の努力をなすに至らしめるからして、人々は哲學者に甚だ廣大なる權利を認めんとする。併し余輩は社會學に對する哲學者の任務を、彼は歴史哲學者として、或は法律哲學者として活動するが如くに、時々社會哲學者として活動し得ると云ふより以上の意味に考へ得ない。又社會及び共同生活の概念を分析すると、此處には個別科學の多數が共働して居ることが、直ちに示されると思ふ。而して精神科學或は文化科學の諸學科の研究者は、彼が研究の鋤を入れ得る何處に於ても、自分の専門の研究を行なふと同時に、社會學的問題の究明の爲にも働いて居る如く、社會學的知識は總て其等の諸學科の共同

研究を切望するのである。人間の共同生活關係は主として或一の範域(例へば經濟的關係の範域の如きもの)に屬するものでない。而して吾人は上に述べしが如き見地からして、哲學は社會學と、他の諸科學よりも一層親近なる關係を有することを認め得るとするも、此處に注意すべき二つの點がある、第一には哲學者にありても、彼の社會學的努力の効果は、哲學者としての彼の専門的堪能に依て定まるであらう。彼の哲學が愈々深遠であるほど、彼の社會學は愈々深遠となるであらう。第二には社會學者と認められる哲學者は、其の研究及び教授に於て、狹義の社會學的問題に己を制限せず、哲學一般を研究する傾向を、常に保持するであらう。然らざれば彼の社會學的問題の研究は、決して進歩しないであらう。要するに大學に於ける社會學の講義は、哲學又は經濟學及び其他の専門學科の教授によりて、充分に或は正當に與へ得られるので、特に社會學の教授職を新たに設置する必要は、毫も存しないと思はれるのである。

フォン、ベーロー氏の論文に就て、以上述べ來りし處を總括して考へると、同氏は先づ獨逸の學界に於ても以前より殊に浪漫主義時代からして、多くの學科が社會學的問題を研究して居るので、又其等の研究は英佛の實證主義社會學よりはより正當なる方針に於て進んで居るので、今日英佛の實證主義社會學を獨逸に輸入する必要は毫も存しないことを論證せんとして居る。余は此處に獨逸學界傳來の社會學的問題の研究方針が、英佛の學界傳來の夫よりも正當であるや否やに

就て、敢て論評を下さうと思はないので、夫れは後に至つて論ずることとするが、何れにしても獨逸の學者が、以前より種々なる學科に於て、社會學的問題を深く研究して居たことは疑はれない事實である。余は十數年前嘗て數年間引き續いて社會學史を講述せし際、此の事に特に注意して置いたのである。併し夫れが爲めに今日獨逸に於て、社會學を一の獨立なる科學として建設する必要はないと、論ずることは出来ない。此の事は次にフォン、ベーロー氏の説を論評せる獨逸社會學者の説を考察する際に、詳しく論述することとする。

フォン、ベーロー氏は次に、總合的な普遍的或は一般的學問としての社會學の不可能なるを、大に力説して居る。而して總合的、一般的學問としての社會學の概念を、同氏の如くに解するに於ては、夫れが不可能なることは云ふまでもない。併し今日の總合的、一般的學問として社會學を建設せんとする社會學者は、決して同氏の解するが如き意味に之を解して居ないのである。されば同氏の説に對して、總合的社會學の成立を主張する獨逸の社會學者が、大に反對して居るのは當然である。然らば其等の社會學者の所説は如何なるものであるか。余は後に之を考察して、余の解するが如き意味の總合社會學の可能なる所以、又必要なる所以を論述することとする。尙ほ總合的、一般的社會學の不可能を主張する意見は、決して新しいものでなく、コントが一般的社會學として社會學の建設を唱へ出した頃から、既に起つて居るのである。それで余は後にフォン、ベーロー

一氏の意見に反對して、一般的社會學の可能及び必要を主張する、今日の獨逸の社會學者の説を考察する際に、獨逸に於ても同氏以前に一般的社會學の不可能を主張する如何なる意見が、既に現はれて居たかを示したいと思ふ。

終りにフオン・ペーロー氏は、特殊科學としての社會學の成立に就て、さきに述べし如くに論じて居るのであるが、其の論旨に不明な點がある。要するに同氏は特殊科學としても社會學は全く不可能であると云ふのか、又は特殊科學としては社會學は論理的に又實際に成立し得るが、大學に於ては之を獨立の一教科として認め、特に其の教授職を設ける必要はなく、他の専門學科の教授をして、其専門學科に附屬して之を研究させ、講義させるので充分であると云ふのか、明白でない。換言すれば特殊科學としての社會學も不可能であると云ふのか、又は夫れは可能であつても、大學に於て夫れが爲めに特別な教授職を設ける必要はないと云ふのか明白でない。併し今日の學界の状態に於て、大學に於て專任の教授を設ける必要がないと認められる様な學問は、獨立な學問として存立し得ないと考へることが出来るから、同氏の意見はつまり特殊科學としても社會學の不可能を唱へるものと見做し得られる。されば總合的一般的社會學は同氏の論する如く不可能であるが、併し特殊科學としての社會學は可能である、否な必要であると主張する獨逸の社會學者が、同氏の意見に反對するのが當然である。而して特殊科學としての社會學の成立を、學問論的に始めて明確に論述したのは、獨逸のジムメル氏であり、又今日一般的科學としての社

會學を排斥しつゝ、しかも特殊科學としての社會學の建設に、専ら力を注いで居るのは、獨逸の社會學者にして、夫れは現今の社會學界に於ける獨逸社會學者の一特色であるとも見做し得られるのであるから、余は本論文に於ては、先づフォン、ペーロー氏の意見に對して、特殊科學としての社會學の成立を主張する獨逸社會學者の加へたる駁論から考察し始めたいと思ふ。

今フォン、ペーロー氏の意見を批判して、特殊科學としての社會學の可能及び必要を大に主張した一人は、新設のケルン大學の教授レオボールド、フォン、ウイゼ氏 (Leopold von Wiese) である。それで余は此處に先づ同氏の説から考察し始めることとする。併し同氏の説はつまりジメル氏の説を租述して之を發展させたものであり、又同氏に先だち或は同氏と共に、特殊科學としての社會學を唱へて居る學者は少なくないから、而して又其等の學者の説をも合せて考察するに非らずは、今日の獨逸の社會學界に於ける同一の方針の全般を理解することが出来ないから、余は先づフォン、ウイゼ氏の説を考察したる後、次に今日同一の方針を代表する主要なる獨逸の社會學の社會學論を考察したいと思ふ。而して夫れより又一般的總合的社會學の可能及び必要を主張する獨逸社會學者の説を考察し、最後に社會學と社會哲學とを區別し、而して科學としての社會學は組織社會學、純正社會學及び總合社會學の三部門より成立す可きものと見る余の見解からして、今日の獨逸の社會學論争を評價し、以て余の見解を論證したいと思ふ。